

【注釈】

『古本説話集 全注釈』長谷寺叅詣男、以蟲替大柑子事（第五八）

（はしせでちばんけいのきとて、おむをもちてだいかうじにかかると）

其の二（九一丁オ7～九五丁ウ6）

椎葉 富美・安倍 素子・市瀬めぐみ・川浪 玲子
金 成根・椎葉 康浩・福田 益和・山口 康子

Kohonsetsuwashu Zenchushaku

Hatsusedera sankeinowotoko abuwomochite daikaujinihafurukoto : LVIII

Part 2 (91 kyou omote 7 gyou ~ 95 kyou ura 6 gyou)

Fumi SHIIBA, Motoko ABE, Megumi ICHISE, Reiko KAWANAMI

Sungkeun KIM, Yasuhiro SHIIBA, Yoshikazu FUKUDA, Yasuko YAMAGUCHI

要約

『古本説話集』は、編者未詳。成立は平安末期から鎌倉初期とされている古写本である。唯一の伝本である旧梅澤記念館蔵鎌倉中期写本（現東京国立博物館蔵）には題簽も内題もないため、本来の書名も不明であり、一般に『古本説話集』と呼ばれている。

流麗な平仮名文で、大齋院選子内親王の話に始まり、関寺の牛仏の話で終わる。王朝文学の著名人を中心に樵夫や貧女の話に至るまで有名無名人の逸話や観音霊験譚などが収められている。『今昔物語集』以下の諸説話集との共通説話も多いが、書承関係は明らかになっていない。

本稿は、二〇一六年から始め、四回（四年間）にわたって発表した『古本説話集』「大齋院事（第二）」の注釈が、二〇二〇年三月に終了したことを受け、引き続き、後半部第五八話の注釈を試みるものである。

第一話と同じく、「本文」は原文に復元できることを目指す一方、読みやすさも考慮し、比較の便のため、「対照説話」を本文の下端に記した。「口語訳」は、平易かつ明確な現代文を用い、原文の雰囲気も伝わることも意識した。「語釈・語法」は「注釈」の根拠を示し、特に語学的視点を多く取り入れるように心がけた。さらに「補説」として、「注釈」における重点箇所を特記した。

キーワード 古本説話集・長谷寺・観音

解題

『古本説話集』（以下、「本集」と略記）は、昭和二四年「新指定国宝展」で世に知られた。翌年、梅澤彦太郎氏の所有に帰し、以来、題簽も内題もないため『梅澤本 古本説話集』と称されることが多い。梅澤記念館・文化庁旧蔵、現在は東京国立博物館所蔵である。

本集の書誌等については、『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編・貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）の田山方南氏の解説、および『梅澤本 古本説話集』（古典資料類従六・勉誠社・一九七八年）の川口久雄氏の解説に詳しい。墨付全部一三六丁。奥書識語はなく、冒頭二丁オ〜四丁オ、および六〇丁ウ〜六一丁ウ

に、目録（漢字表記の説話表題を本文の説話配列に従って列記したもの）がある。全70話が、前半46話、後半24話に二分され、一般に前半を上巻、後半を下巻と称されている。

本集の説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と共通のものが多く上、『世継物語』『打聞集』などの小説話集との重なりも多く、類縁性や前後関係が論じられてきた。しかし現在のところ、諸説話集の伝本の一つ、あるいは異本・抄本とは考えにくく、また、どの説話集とも相互の承接関係は証明されず、それらの諸説話集との共通祖本が想定されている。現在のところ、天下の孤本とみるべきである。

成立年代、著者（編者もしくは筆録者）、成立事情等は不明であるが、『古本説話集総索引』（山内洋一郎編・風間書房・一九六九年）の刊行以来、日本語史的な観点からの研究も進められている。鎌倉中期筆写と思われる貴重な古写本である。

凡例

一 表題

本集には、説話表題（説話本文の前に記載された表題）は見られないので、目録表題をそれぞれの該当説話本文の前に掲げ、訓読を振り仮名の形で示し、その根拠について述べる。また、川口久雄校訂『梅澤本 古本説話集』（岩波文庫・一九五五年）以下の研究書にならない、説話の話番号を（ ）をつけて付し、（第二）（第二）の形で示す。

二 本文

1 底本は、東京国立博物館所蔵（梅澤記念館・文化庁旧蔵）『古本説話集』を用いた。許可を得て直接撮影した写真の他、『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編・貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）、『梅澤本 古本説話集』（古典資料類従六・川口久雄解説・勉誠社・一九七七年）、『古本説話集』（勉誠社文庫・124・川口久雄解説・勉誠社・一九八五年）、『e 國寶 国立博物館所蔵 国宝・重

要文化財」(http://www.emuseum.jp)を参照する。

2 底本の二丁を二頁として、表をオ・裏をウと表記し、行数を本文の上に算用数字で記す。なお、勉強社文庫の頁数を（ ）で示す。

3 原文の漢字はそのまま漢字で表記し、原文に近い字体を選ぶ。

4 訓みをつけるときは、歴史的仮名遣いを用い（ ）で囲む。

5 繰り返し符号・見せ消ち等は原文どおり表記し、必要に応じて注をつけるか、「語釈・語法」の項で説明する。

6 本文の仮名表記を、漢字表記にするときは、振り仮名として原文の仮名をつけた。表記する漢字は、現行の漢字とする。 例 大殿・齋院

7 仮名遣いは、右側に正用を【】で示す。 例 なを

8 必要に応じて句読点・濁点・引用符をつけ、会話文には「」をつける。

三 対照説話

対照すべき説話を、本集本文の行切りに合わせて記載する。テキストは、「新日本古典文学大系」など、一般的なものを選ぶ。

四 口語訳

逐語訳を心がけ、必要に応じて適宜主語等を（ ）で補う。

五 語釈・語法

丁の表（オ）・裏（ウ）ごとに、該当箇所の行数を算用数字で示し、特に語学的視点を取り入れるよう心がける。

長谷寺叅詣男、以龜替大柑子事（第五八）

其の二①（九一丁オ7～九二丁オ10）

【九一丁オ】（一八五頁）

7 これを手まさぐりにしつゝ、行くほど

8 に、蛇の一つぶめきて顔のめぐりに

六 補説

特に詳述する必要のある問題についての考察を記す。

七 類話

紙幅の都合上、各話の末尾につける予定である。

八 参照テキスト等

略号とテキストは次のとおりである。

・岩波文 『梅澤本 古本説話集』川口久雄校訂・岩波文庫・一九五五年

・全書 『古本説話集』日本古典全書・川口久雄校註・朝日新聞社・一九六七年

・総索引 『古本説話集総索引』山内洋一郎編・風間書房・一九六九年

・全註解 『古本説話集全註解』高橋貢・有精堂・一九八五年

・新大系 『古本説話集』新日本古典文学大系42・『宇治拾遺物語』と併録・中村義雄、小内一明校注・岩波書店・一九九〇年

・全訳注 『古本説話集 上下』全訳注高橋貢・講談社学術文庫・二〇〇一年

・新聞論文 『古本説話集下巻 本文と注釈』第五十八話 長谷寺叅詣男以龜替――

新聞水緒・花園大学国文学会編『花園大学国文論究』34号・二〇〇六年十二月

なお、本話については、『宇治』および『今昔』にはば同文の説話が存す

る。両書の注釈も随時参照した。

九 参考文献

参考にした文献については、できる限り該当部分に書き入れる。記載でき

なかつたものは、各話の末尾につける予定である。

『今昔物語集』（巻第十六參長谷男依觀音助得富語第二十八）

（新日本古典文学大系35・一九九三年・岩波書店・底本…東大本甲）

而ル間、

蛸、顔ヲ廻ニ

- 9 あるを、うるさければ木の枝折りて払
 10 ひ捨つれいば、なをたゞ同じ様にうるさく

【九二丁ウ】(一八六頁)

- 1 ぶめきければ、手にとらへて腰をこの藁
 2 の筋にてひき括りて持たなければ、
 3 腰をく、られてはかへはえ行かでおめき飛
 4 みけるを、長谷に参りける女車の前
 5 の簾をうちかづきてるたる児、このい
 6 とうつくしげなるが、「あの男の持ちたる物
 7 は何ぞ。かれ乞ひて我に得させよ」と、馬に
 8 乗りてともある侍に言ひければ、そ
 9 の侍「かの男、その得たる物、若き
 10 みの召すに参らせよ」と言ひければ、「佛の賜びた

【九二丁オ】(一八七頁)

- 1 る物に候へど、かく仰言候へば、参らせ候はん」と
 2 て、取らせたりければ、「この男、いとあはれ
 3 なる男也。若君の召す物を心やすく
 4 参らせたること」と言ひて、大柑子を「これ、
 5 喉渴くらん、食べよ」とて、三ついとかうばしき
 6 陸奥国紙に包みて取らせたりければ、
 7 取りつたへて、恥取りける侍取らせ
 8 たりければ、「藁一筋が、大柑子三つに
 9 なりぬること」と思ひて、木の枝に結び付け
 10 て肩にうちかけて、行くほどに、

飛ブラ、煩シケレバ木ノ枝ヲ折テ掃
 ヒ去レドモ、尚同ジ様ニ

来バ、舩ヲ手ヲ捕ヘテ、腰ヲ此藁

筋ヲ以テ引キ括リテ持タルニ、

舩腰ヲ被括レテ飛ビ

迷フ。而ル間、京ヨリ可然キ女、車ニ乗テ参ル。車ノ

簾ヲ打チ纏テ居タル児有リ。其形チ

美麗也。児ノ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物

ハ何ゾ。其レ乞テ得セヨ」ト。馬ニ

乗テアル侍来テ云ク、

「彼ノ男、其ノ持タル物若君

ノ召スニ、奉レ」ト。男ノ云ク、「此レハ観音ノ給タ

ル物ナレドモ、此ク召セバ奉ラム」ト

云テ渡タレバ、「糸哀レ

ニ奉タリ」

トテ、

「喉乾クラム。此レ食ヨ」トテ、大柑子三ツヲ齧シキ

陸奥国紙ニ裹テ車ヨリ取タレバ、

給ハリテ、

「藁筋一ツガ大柑子三ツニ

成ヌル事」ト思テ、木ノ枝ニ結び付

テ肩ニ打係テ行ク程ニ、

口語訳

これ（蕨一本）を（手で）もてあそびながら（歩いて）行くうちに、蛇が一匹ぶんぶん羽音をたてて顔のまわりに（飛んで）いるのを、わずらわしいので木の枝を折って追い払ったけれども、やはりただ同じようにわずらわしくぶんぶん羽音をたてたので、（蛇を）手でつかまえて（蛇の）腰をこの蕨すじでひきくくって持っていたので、腰をくくられてはかへは行けずぶんぶん飛びまわっていたのを、長谷（寺）に参詣する女車の前の簾を（持ち上げ）頭にかぶって（外を見て）いた子供でたいそうかわいらしい子が、「あの男が持っている物は何か。あれを（男に）頼んで私にくれ」と、馬に乗って供をしている従者に言ったので、その従者が「その男、その手に入れた物を、若君がお望みになるので差し上げよ」と言ったところ、（青侍は）「仏がくださった物でございますが、このようにお申しつけがございますので、差し上げましょう」と言って、（蛇を）与えたので、（女車の主人は）「この男は、たいそう感心な男だ。若君がお望みになる物を気持ちよく差し上げたことよ」と言って、大柑子を「これを、喉が渴いているだろう、食べなさい」と言って、三個をとてよい香りのする陸奥国紙に包んで与えたので、（それを）取り次いで、蛇を受け取った従者が（青侍に）与えたので、「蕨一本が大柑子三個になったことよ」と思って、（大柑子を）木の枝に結びつけて肩にかけて、（歩いて）行くうちに、

語釈・語法

【九一丁オ】

●7これを手まさぐりにしつゝ行くほどに、 『宇治』 同文、『今昔』 該箇所なし。「手まさぐり」は、本集には本例のみ。『日葡辞書』には「Tenasaguri. テマサグリ（手まさぐり）人が慰みに物を書く時などのように、手でもてあそんでいること」とある。ここでは青侍が蕨一本を手でもてあそんでいることを指す。「行（い）く」は同義語に「ゆく」がある。『日本国語

【邦訳 日葡辞書】（岩波書店・1980年）

Iqi, u, ita. イキ, ク, タ（行き, く, た）行く。 Yuqi, u（行き, く）と言う方がまさる。 例, Arimaye iqu, I, yuqu.（有馬へいく, または, ゆく） ▶ Fibiqi; Funbet; Ran; Yuqi, qu.
 Yuqi, qi, 1) ita. ユキ, ク, イタ（行き, く, いた）行く。
 ※ 1) qu の誤り。 ▶ Iqi, u; Qiqin.

大辞典 第二版（以下、『日国』とする）の「ゆく」の【語誌】には、「使用頻度は、室町期を過ぎる頃まで『ゆく』が優勢だった。『ゆく』は和歌のほか文字言語、ことに訓点資料に多く用いられた」とある。「ゆく」は『新撰字鏡』『色葉字類抄』（以下、『字類抄』とする）『類聚名義抄』（以下、『名義抄』とする）などの古辞書には古くから記載されており、多様な文字があてられている。「いく」は『日葡辞書』で初めて記載され、「Yuqi, u（行き, く）」という方がまさる」とあることから、中世末期までは口語的な言い方とみられていたらしい。本集では、「いく」23例の他に、「いきさる（行去）」「いきちる（行散）」「いきつく（行着）」各1例の、計26例が用いられている。一方「ゆく」は25例の他に、13種の複合動詞「あれゆく（荒行）」「かりゆく（狩行）」「とびゆく（飛行）」「なりゆく（成行）」「ひきもてゆく（引持行）」「ふけゆく（更行）」「みちゆき（道行）」「もてゆく（持行）」「ゆきいる（逝入）」「ゆきき（往来）」「ゆきやる（行遣）」「ゆくかた（行方）」「ゆくすゑ（行末）」各1例の、計38例が用いられており、本集でも「ゆく」が優勢である。なお、ここから長文が続き、九二丁ウ7「みづもなし」まで31行に及ぶ。

『天治本 新撰字鏡（増訂版）』（臨川書店・一九六七年）

㊦上ノ由久

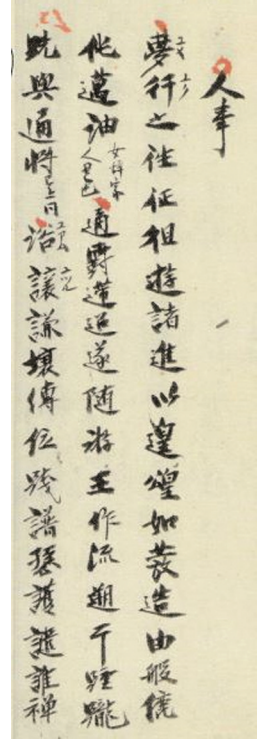
倭
 作浪上
 上大市
 下徳上ノ

㊧所隣及由久

倭
 所隣

★には頭注があり、㊦㊧はその行数で、享和本・群書類従本との異同を指摘する。

『色葉字類抄 二卷本』（尊経閣善本影印集成19・八木書店・二〇〇〇年）



●8 虻の「つぶめきて」 『宇治』「蜻」ぶめきて、「今昔」「蛸」。「虻」は、

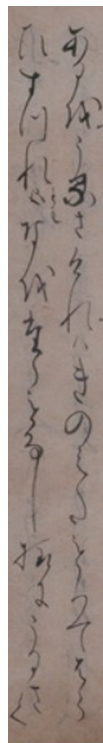
中古・中世の仏教関係の文献にしばしば登場する。詳細は、『古本説話集』研究上の諸問題（二）虻のいる光景―下巻第五十八話から―（長崎純心大学大学院人間文化研究科編「人間文化研究」第12号・二〇一四年三月）参照。なお、「虻」を「一つ」と数えているが、本集では「えもいはぬむまの」をたからにする（32オ7）、「た、このうし」してはこふ（68オ4）など動物に使用している例がある。「ぶめく」の「ぶ」は虻の羽音を模した擬音語で、「めく」はそのような状態・様子であることを示す動詞性接尾語である。中古末から中世を通じて、特に擬音語・擬態語に付く例が多く見られる。本例もあぶの羽音「ぶ」の下に「めく」を付ける。『羅葡日辞書』[Bombilio(羅：ぶめく)]の項に「Abu, fachino coyeno gotoqu bumequ.(あぶ はちのこえのうまぶめく)」とある。なお、本集の「ぶめく」の用例は、「うめく」(28オ7)「きらめく」(29ウ9)「そよめく」(37ウ5)「めくるめく」(113オ9)の各1例、計4例、「ぶめく」は本話他に2例(91ウ1・3)ある。

●8 顔のめぐりにあるを、『宇治』同文、『今昔』「顔ヲ廻ニ飛ブヲ」。「めぐり」は「あたり。周囲・周辺」の意。本集には本例を含めて4例。類義語として「わたり」(8例)、「あたり」(3例)、「辺」(7例)などがあげられる。

●9 うるさければ木の枝折りて払ひ捨つれども、『宇治』「うるさければ、

木の枝を折りて払捨つれども」、『今昔』「煩シケレバ木ノ枝ヲ折テ掃ヒ去レドモ」。「うるさし」は、「わずらわしい」の意。本集には、本例の他、次行に1例(91オ10)用いられている。「払ひ捨つ」は、「不要なものを取り除く」意。ここでは虻を邪魔なものとして追い払っている。なお、『日国』の「はらひすてる(払捨)」の項では、本例を「木の枝を折りてはらひすつれば」とする。諸注釈の本文は、「きのえだを」りてはらひすつれば(岩波)、「木の枝を折りて拂ひ捨つれども(全書)」とあり、『総索引』以降は「きのえだをりて」となっている。影印本で確認すると、「を」と「り」の間はまっすぐ続いており、繰り返し符号は見えない。また、「はらひすつれば」の「れ」の下に補入記号「い」を入れ、右横に「とも」と記載。その下の「は」に二重線の見せ消ちがある。よって、本文は『総索引』以降と同じく「きのえだをりてはらひすつれども」と訓む。

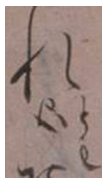
〔九一丁オ9〕



「たをり」



「れいば」



用例は、「e 國寶国立博物館所蔵 国宝・文化財」より。本集の用例は、以下同じ。

●10 なをた、同じ様にうるさくぶめきければ、『宇治』同文、『今昔』「尚同

ジ様ニ来バ」。「なを(ほ)」は「やはり」の意。本集の用例は15例、すべて仮名遣いの「なを」である。「た」は既出(古本説話集全注釈(第五八)其の一・長崎純心大学編「純心人文研究」第27号・二〇二二年二月・P9 参照)。「うる

さし」既出（91オ9）、「ぶめく」既出（91オ8）。

【九一丁ウ】

●1腰をこの藁の筋にてひき括りて

『宇治』「腰をこの藁すぢにてひきく、りて」、「今昔」「腰ヲ此藁筋ヲ以テ引キ括リテ」。本集の本文は「すぢにて」の「に」を見せ消ちにして右に「し」と傍書する。本集に「して」は26例、「九一丁ウ」



「にて」は49例あり、いずれも手段・方法・材料を示す。「古本」「して」・『宇治』「にて」、「今昔」「ヲ以テ」と三形が同じ文脈の中で用いられている。「して」「にて」は和文で、「ヲ以テ」は漢文訓読文の用語とされている。

●2持たりければ、「持たり」は既出（前出『古本説話集全

注釈』（第五八）其の一・P.17参照。

●3腰をく、られてほかへはえ行かだぶめき飛みけるを、

『宇治』「腰をく、られて、ほかへはえ行かだ、ぶめき飛まはりけるを」、「今昔」「衲腰ヲ被括レテ飛ビ迷フ」。「え行かだ」の「え」は否定表現を伴って、「…できない」の意。「とみ（飛）」は、「とび（飛）」と同じ。マ行・バ行の相通現象である。本集には「とむ（飛）」は本例のみ、「とぶ（飛）」は11例ある。

●4長谷に参りける女車の前の簾を、

『宇治』同文、「今昔」「而ル間、京ヨリ可然キ女、車ニ乗テ参ル。車ノ簾ヲ」。

「はつせ」に「長谷」の文字をあてることについては、「古本説話集の研究上の諸問題（一）―長谷とハッセ・ハセ―」（長崎純心大学大学院人間文化研究科編「人間文化研究」第11号・

二〇一三年二月）参照。「女車」は、女性が外出の際などに乗る牛車。簾の内側にもう一枚下簾をかけ車内の人の姿を

【邦訳 日葡辞書】

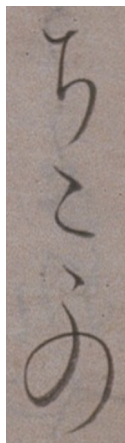
†Catçugui, gu, uida. カツギ, グ, イダ (被ぎ, ぐ, いだ)
頭にかぶる。本来の正しい語は, Cazuqi, qu (被き, く) である。

隠し、衣の裾を外に垂らした。青侍は、前の簾を持ち上げた女車と行き違っている。「参りける」の「けり」については、関一雄の著書（現代語訳で読み直す『竹取物語』笠間書院・二〇一九年・P.244）、糸井通浩の論考（日本語の屈折史（二）―「語り」言説の近代化）日本語文化研究会編「日本語文化研究」第二十六号・二〇二二年九月）を参考にした。このことおよび「今昔」本文をもとに、女車は長谷寺に向かってしていると解釈した。

●5うちかづきてゐたる児、このいとうつくしげなるが、

『宇治』「うちかづきてゐたる児の、いとうつくしげなるが」、「今昔」「車ノ簾ヲ打チ纏テ居タル児有り。其形チ美麗也」。「かづく」は、「かづく」ともとれるが、『日葡辞書』の記述により、「かづく」ととる。ここでは、たいそうかわいらしい子供が女車の前の簾を持ち上げ、頭にかぶるようにしている様子をいう。諸注釈では、「ちこ」ととり「、」は衍字とする。

【九一丁ウ5】



●6あの男の持ちたる物は何ぞ。

『宇治』同文、「今昔」「彼ノ男、其ノ持

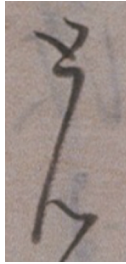
タル物ハ何ゾ」。「あの」は本集に6例（11ウ10・91ウ6・95オ7・113ウ6・115ウ8・120ウ5）。「この」に対して話し手から遠い位置にある事物や人などを指す代名詞「あ」に格助詞「の」を伴った連体詞。『古語大鑑一』（築島裕編・東京大学出版会・二〇一二年）によると、「あの」は上代には見られず、中古から現れる語である。当初は同じ遠称の代名詞「かの」よりも劣勢であるが、

中世以後「かの」よりも優勢になる。『日国』によると、連体詞「あの」には、①話し手、聞き手両者から離れた事物、人などを指し示す意と、②過去の経験や目の前にない事物、人など、話し手、聞き手両者に共通の話題を指し示す意とがある。確実に目の前にあるものの遠称として「あの」が用いら

れていると断定できるのは本例のみである。

- 7 **かれ乞ひて我に得させよ** 『宇治』「かれ乞ひて、我に賜べ」、「今昔」
 「其レ乞テ得セヨ」。「かれ」は話し手と相手との双方から離れた事物・場所・
 方角・時・人を指す代名詞である。ここでは藁の筋で腰を縛られて飛んでい
 る蛇を指す。「乞ふ」は「他者に物を与えてくれるように求める」ことで、
 ここでは、男に持っている蛇をくれるように頼むことを意味する。本集には、
 他に3例(34オ8・109オ7・117オ6)。「得させよ」は、「得」に使役の助動詞「さ
 す」が付いたもので、「くれる・やる」の意。本集には、本話での4例を含
 めて5例(91ウ7・94オ3・97オ6・98ウ10・106オ8)。いずれも、会話文で用い
 られている。

- 7 **馬に乗りてともにある侍に** 『宇治』同文、「今昔」「馬ニ乗テアル侍」。
 「とも」について、諸注釈は「とん」と訓み、「とも」の古い表記・あるいは
 特殊な表記とするが、ここでは「も」の異体字とみる。本例と同様の表記は、
 八六丁オ6に「めことも」がみられるのみ。「とも」は、本集に他に5例
 (42ウ6・81オ1・82オ5・92ウ5・113オ3)みられる。1例は「御とも(15ウ6)」
 である。「侍」は、貴人の家に仕えて雑用にあたる男の従者をいう。使い・
 供・宿直・警固などに従い、場合に応じて武器を持つ。「に」は資格を表す
 格助詞。「馬に乗って供をしている従者に」と解釈する。



《九一丁ウ7》

《八六丁オ6》

- 9 **かの男** 『宇治』該当箇所なし、「今昔」「彼ノ男」。「かの」は話し手、
 相手の両者から離れた物や人物を指す代名詞「か」に格助詞「の」を伴った
 連体詞。本集用例は本例を含めて全4例(16オ9・62ウ1・91ウ9・94ウ1)。
 上代では「か」は未発達で用例は極めて少なく中古以後になって用いられる

が、中世以降は平安時代に成立した「ア」系の指示語が優勢になるにつれて
 「かの」は漢文脈の強い文体や、やや改まった場面に用いられるようになって
 ゆく。本集用例のうち2例は、話し手と相手との双方から離れていて見え
 ないが、両者に了承済みの事物の連体修飾語として用いられている。本例を
 含む2例(91ウ9・94ウ1)はいずれも「かのをとこ」の形で会話文中での相
 手への呼びかけと解して「その男」と訳した。

- 9 **その得たる物**、『宇治』「その持たる物」、「今昔」「其ノ持タル物」。「そ
 の」は、中称代名詞「そ」に格助詞「の」を伴った連体詞。本集用例は127例。
 「そ」は、『角川古語大辞典』によれば、「古くは、現場指示を主とする」「こ
 に対し、既述の物や事柄を指示する文脈指示に用いるのが普通。…中略…
 現場における聞き手の領域を指示する中称代名詞としての用い方は、実質的
 には中古以後になって確認できる」とする。現場指示、すなわち直接見
 ると思われる用例は、本例の他に第五五話「そのじやのうへなふみそ(83ウ
 9)」のみである。なお、本集のみ「得たる」となっているが、これは男が
 「虻」を観音様からの授かり物として得たことを暗示するような表現である。

- 9 **若きみの召すに参らせよ** 『宇治』「若君の召すに参らせよ」、「今昔」
 「若君ノ召スニ、奉レ」。「若君」は身分の高い若者を敬って用いる語で、本
 集用例は本例を含めて8例(59オ5・60オ4目録・68ウ9・69オ2・69ウ1・70オ
 1・91ウ9・92オ3)。性別不明の本例以外はすべて男性である。この「若君」
 は「女車の前のすだれをうちかぎてあたる児(91ウ4)」とも表現されてい
 ることから、身分の高い子供であったと思われる。「召す」は本集に22例用
 いられている。その内訳は、①(人を)、お呼びになる…15例、②(物などを)
 お取り寄せになる…4例、③(食べ物・水などを)召し上がる…2例、④(衣
 服を)お召しになる…1例である。本例は②の意で、ここでは「お望みに
 なる」と訳す。なお、本話には他に3例(92オ3②の意・93オ7③の意・94ウ10
 ③の意)ある。「に」は順接の接続助詞「ので」の意ととる。「まゐらす」
 は「上位者へ物などをすすめる」意の謙讓語で既出(『古本説話集全注釈』(第

一）其の一・長崎純心大学編「純心人文研究」第23号・二〇一七年二月・P10参照。

【九二丁オ】

●1 かく仰言候へば、参らせ候はん
『宇治』「かく仰事候へば、参らせて候はん」、「今昔」「此ク召セバ奉ラム」。「仰言」は「貴人のご命令、お申しつけ」の意。本集用例は本例のみ。「候ふ」は既出（前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・補説2・P22参照）。

●2 取らせたりければ、
『宇治』同文、『今昔』「渡タレバ」。「取らす」は「与える」の意で、本集用例は36例。本話には8例（92オ2・6・7・93ウ1・95オ7・95ウ3・97オ7・98ウ8）用いられている。

●2 「この男、いとあはれなる男也。
『宇治』同文、『今昔』「糸哀レニ奉タリ」。「あはれなり」は既出（前出『古本説話集全注釈』（第一）其の一・補説2・P18参照）。ここでは「殊勝なさま・感心なさま」の意で、本集用例55例中6例（81ウ7・82オ7・107オ10・107ウ10・109オ3・134ウ8）は、同様の意と解釈される。

●3 若君の召す物を心やすく参らせたる事、
『宇治』「やすく参らせたる事」、「今昔」該当箇所なし。「召す」は既出（91ウ10）。「心やすし」は「気軽だ・他人に心遣いをさせないさま」の意。ここでは「気持ちよく」と訳す。本集用例は、他に1例（127ウ5）。「こと」は文末について感動の意を表す。本集用例は全8例（20オ4・28ウ8・81ウ1・7・92オ4・9・95ウ5・128ウ6）で、後半部に6例（本話に3例―92オ4・9・95ウ5）を見出しますが、悲しみや喜びの感情を表す際に用いられている。なお、第七話の編者の結語である「いとめでたき事（20オ4）」以外は、すべて会話文か心内文である。

●4 大柑子を「これ、喉渴くらん、食べよ」とて、
『宇治』同文、『今昔』「喉乾クラム。此レ食ヨ」トテ。「大柑子」の訓みと古辞書の記載については、既に本話の表題の項目で先述したとおりである（前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・P5参照）。本集には、「大柑子」3例（60ウ3目録・92オ4・8）、「柑子」8例（93ウ1・8・94オ3・95オ4・7・95ウ2・96ウ2・3）、計11例で、すべて本話に関わっている。↓ **補説1**

●5 いとかうばしき陸奥国紙
『宇治』同文、『今昔』「靨シキ陸奥国紙」。

「かうばしき」は「かおりがよい・においがよい」の意。本集には本例を含めて3例ある。「たき物、かの、えもいはずかうばしく（8ウ2）」、「うすいのきぬの、いみじうかうばしきを（54ウ4）」で、前者は薫き物、後者は衣の香りについて述べる。「陸奥国紙」は陸奥で漉かれ、平安時代中期から鎌倉時代にかけて上流階層に用いられた紙である。「檀紙」とも呼ばれたが、本集に「檀紙」の用例はなく「みちのくにがみ」のみが本例の他に1例、「ふところより、みちのくにがみにかきて、たてまつりたまへば（12ウ6）」で、大納言が懐にあつたみちのくに紙を用いる場面である。『蜻蛉日記』に「ふところよりみちのくにがみにてひきむすびたるふみの、かれたるすきにさしたるをとりいでたり（新大系 P232）」、「源氏」に「みちのくにがみにてとしへにければ、きばみあつこえたる五六枚、さすがにかうにいとふかくしみたるにかき給へり（新大系三 若菜上 P284）」とあり、平安時代の貴族社会では「陸奥国紙」を身近に置いて日常的に用い、良い香りを薫きしめる習わしがあつたことがわかる。

●7 取りつたへて、虻取りける侍
『宇治』「侍、とりつたへてとらす」、「今昔」「車ヨリ取タレバ、給ハリテ」。「車ヨリ」は、本集と「宇治」にはないが、牛車から出された、紙に包んだ大柑子三個を供の侍が受け取って青侍に与えたと考えられる。したがって、「あぶとりけるさぶらひ」は「むまにのりてともにあるさぶらひ（91ウ8）」の言い換えとみなした。

●9 木の枝に結び付けて肩にうちかけて
『宇治』同文、『今昔』「結び付け」は、結んで離れないようにする意。「うちかけて」は、ひよいとひっかける意。本集には本例の他に2例（44ウ10・66ウ1）ある。他の注釈書には、「引出物は木の枝に結びつけて肩にかけるのが、當時の風習であつた（『全書』）」「当時の風習として褒美の品は枝に結び付けるのが、作法の一つ（『新大系』）」「引き出物は木の枝につけた（『新聞論文』）」と説明されている。

長谷寺參詣男、以臨替大柑子事(第五八)

其の二②(九二丁オ10く九五丁ウ6)

【九二丁オ】(一八七頁)

10 「ゆえある人」

【九二丁ウ】(一八八頁)

- 1 の忍びて参るよ」と見えて、待などあ
- 2 また具して、徒歩より参る女房の、歩み
- 3 困じて、たゞ、困りに困り居たるが、「喉
- 4 の渴げば水飲ませよ」とゆき入りなんす
- 5 る様にすれば、供の人々、手惑ひをして、「ち
- 6 かく水やある」と走り騒ぎ、求むれども、
- 7 水もなし。「こはいかせんずる」「御旅籠馬
- 8 や入りにたる」と問へど、「はるかに後れたり」と
- 9 て見えず。ほどくしきやうに見ゆれば、まことに
- 10 騒ぎ惑ひて、為扱うを見て、「喉 渴き

【九三丁オ】(一八九頁)

- 1 て騒ぐ人よ」と見えてければ、やをら歩み
- 2 寄りたるに、「こ、なる男こそ、水のあり所
- 3 は知りたるらめ」「この辺近く、水の清
- 4 き所やある」と問ひければ、「この四、五町かうち
- 5 には清き水候はじ。いかなることの候にか」
- 6 と問ひければ、「歩み困ぜさせ給て、御喉の
- 7 渴かせ給て、水召さんと仰せらるゝに、
- 8 水のなきが大事なればたまぬるぞ」と言ひ
- 9 ければ、「不便に候ことかな。水候所は
- 10 遠き也。汲みて帰り参らば、程経候なん。

是迄為相卿

【今昔物語集】(卷第十六參長谷男依觀音助得富語第二十八)

(新日本古典文学大系35・一九九三年・岩波書店・底本・東大本甲)

品不賤又人

忍テ待ナド

具シテ、歩ヨリ長谷へ参ル有リ。其ノ人歩ビ

極テ只垂ニ垂居タルヲ見レバ、「喉

乾テ、水飲セヨ。既ニ挿入

トス」ト云ヘドモ、共ノ人ミ手ヲ迷シテ、

「近ク水ヤ有ル」ト騒ギ求ドモ、

水無シ。「此ハ何ガセムト為ル」

ト云フ間ニ、此ノ男和ラ歩ビ

寄タルニ、「此ノ辺近ク淨キ水有ル所

知タリヤ」

ト問ヘバ、男ノ云ク、「近クハ

水不候ハズ。但シ、何ナル事ノ候ニカ」

ト。人ミノ云ク、「長谷ニ参ラセ給フ人ノ歩極ゼサセ給テ、御喉

乾カセ給ヒタレバ、水ヲ求ル也。」ト。

男ノ云ク、

【九三丁ウ】（一九〇頁）

是を為氏卿

- 1 これはいかゞ」とて、包みたる柑子を三つながら取
- 2 させたれば、喜び騒ぎて食はせられたれば、
- 3 それを食ひて、やうく目を見開けて、「こはいかなり
- 4 つることぞ」と言ふ。「御喉渴かせ給ければ『水飲ま
- 5 せよ』と仰せられつるまゝに、御とのごもり入らせ
- 6 給つれば、水求め候ひつれども、清きみ
- 7 づも候はざりつるに、こに候 男の、思ひ
- 8 がけぬに、その心を得て候けるにや、この柑子
- 9 を三つ奉りたりつれば、參らせたりつる
- 10 也」と言ふに、この女房「我の喉渴きて絶え入りた

【九四丁オ】（一九一頁）

- 1 りけるにこそ有けれ。「水飲ませよ」と言ひつるはか
 - 2 りは、をのづからおほゆれど、その後の事は、いかに
 - 3 もつゆおほえず。この柑子得させざらましかば、
 - 4 この野中にて消え入りなまし。嬉しかり
 - 5 ける男かな。この男はまだあるか」と問へば、「か
 - 6 しこにまだ候」と言へば、「その男暫しあれと
 - 7 言へ。いみじからんことありとも、絶え入り果てなま
 - 8 しかば、かひなくてこそ止みなましか。このをと
 - 9 この嬉しと思ふばかりの事は、かゝる旅にては
 - 10 いかゞせんずる」とて、「食ひ物などは持て来たるか。
- 【九四丁ウ】（一九二頁）
- 1 物など食はせてやれ」と言へば、「かの男、しば
 - 2 し候へ。御旅籠馬など參りたらんに、物など

「己レ柑子三ツヲ持タリ。此レ奉ラム」ト。

其ノ時ニ、主人ハ極ジテ寝人タルニ、人寄テ驚カシテ、

「此ナル男コノ

柑子ヲ

持タルヲ奉レル

也」ト云テ、柑子三ツヲ奉レバ、主人ノ云ク、「我ハ喉乾テ既ニ絶入シタ

リケルニコソ有ケレ」ト云テ、

柑子ヲ食テ、「此ノ柑子無カラマシカバ、

旅ノ空ニテ絶入り畢マシ。極テ喜シキ事也。

其ノ男ハ何コニ有ゾ」ト問ヘバ、

「此ニ候」ト答フ。主人ノ云ク、

「彼ノ男

ノ喜シト思許ノ事ハ、

何ガ可為キ。食物ナドハ持来タルカ。

食ハセテ遣ハセ」ト云ヘバ、其ノ由ヲ男ニ云フニ、

- 3 食べて罷れ」と言へば、「うけ給はりぬ」とていたる程に、旅籠馬や皮籠馬など来着きたり。「など、かくはるかに後れて、遅くは参るぞ。御旅籠馬などは常に先に立ち、候ふこ
- 7 そよけれ。頓のことなどもあるに、かく後る
- 8 る、はよきことか」など言ひて、やがてそこに屏幔引き、畳なども敷きて、「水ぞ遠かなれ
- 10 ど、困ぜさせ給にたれば、人の召物はこゝにて召

【九五丁】(一九三頁)

- 1 すべきなり」ととまりぬ。夫どもやりなどして、水汲ませ食ひ物しいだしたれば、その男にいと清げに物して食はせたり。物を食ふく、ありつるからしを「何、ならんずらむ。観音導かせ給ことなれば、よもむなくいは止まじ」と思ひたるほどに、白くよき布を三匹取り出で、「これ、あの男に取らせよ。この柑子の喜びは言ひ尽くすべき方もなければ、かゝる旅にては、嬉しと思ふばかりの事は、いかゞはせむする。これはたゞ心ざしの初めを見する也」
- 【九五丁】(一九四頁)
- 1 「京のおほしい所は、そこゝになんをはします。かならず参れ。この柑子のい物は、賜はんずるぞ」と言ひて、布三匹を取らせたれば、喜びて布を取り、「菓筋一つが布三匹になりぬること」、思ひて、脇に挟みて罷るほどに、その日は暮れにけり。

旅籠馬・皮子馬ナド将来ヌ。

即チ屏幔引、

畳敷ナドシテ、

昼ノ食物此ニテ奉ラムズ。此ノ男ニモ食セタレバ食ヒツ。

主人此ノ男ニ云ク、

清キ布ヲ三段

取出シテ給テ云ク、「此ノ柑

子ノ喜シサハ可云尽クモ無ケレドモ、

此ル旅ニテハ何ニカハセムト為ル。

只此ハ志ノ初メ許ヲ見スル也。

京ニハ其ミニナム有ル。

必ズ参レ」トテ、其ノ所ヲ云ヌ。

男布三段ヲ脇ニ挟ムデ、

「菓筋一ツガ布三段ニ成ヌル事、此レ観音ノ御助也ケリ」ト、

心ノ内ニ喜テ行ク程ニ、其ノ日

暮ヌレバ

口語訳

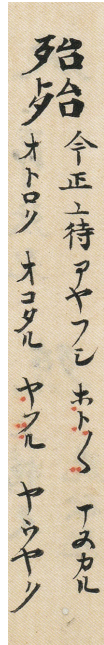
「自分のありそうな人がお忍びで参詣することよ」と見えて、従者などを大勢連れて、歩いて（長谷寺に）参詣する女房で、歩き疲れて、ただただくたびれて座り込んでしまっているのが、「喉が渴いたので水を飲ませよ」と息絶えてしまいうようなようにするので、供の人々はあわてふためいて、「近くに水はあるか」とあちらこちら走り回って騒ぎ、探し求めるけれども、水もない。「これはどうしようか」「御旅籠馬（の荷に水）が入っているか」と問うが、「御旅籠馬」はるか（遠く）に後れている」ということで（姿が）見えない。（女房の）命が危ないように見えるので、（供の人々が）本当に（切羽詰って）大声をあげ慌てふためいて、もてあましているのを（青侍が）見て、「喉が渴いて騒ぐ人よ」と思えたので、そっと近寄ったところ、（供人たちは）「ここにいる男は、きつと水のありかを知っているだろう」と言い、青侍に「この辺り近く、水がきれいなところはあるか」と尋ねたので、（青侍が）「この四、五町（約50メートル）の内にはきれいな水はありますまい。どのようなことがございましたか」と尋ねたので、（供人は）「主人が」歩き疲れなさって、喉が渴きなさって、水を召し上がりたいとおっしゃるのだが、水のないので大変なので探しているのだ」と言ったので、（青侍は）「気の毒なことでございますね。水のあります所は（ここから）遠いのです。（水を）汲んで帰ってまいりますならば、時間がかかるでしょう。これはいかがですか」と言つて、（陸奥国紙に）包んである柑子を三つとも与えたので、（供人たちが）喜び騒いで食べさせたところ、（女房は）それを食べて、やっと目を見開いて、「これはどうしたことか」と言う。（供人は）「御喉が渴きなさったので、『水を飲ませよ』とおっしゃったまま、すっかり気を失ってしまわれたので、水を探しましたが、きれいな水もございませんでした時に、ここにおります男が、思いもよらないことに、その事情を悟りましたのでしようか、この柑子を三つ献上したので、差し上げたのです」と言うと、この女房が「私はそれでは喉が渴いて気を失ってしまったのだなあ。『水を飲ませよ』と言ったことだけは、

自然と思い出されるが、その後のことは、どうにも全くおぼえていない。この柑子をもらわなかったら、この野中で死んでしまっただろう。ありがたい男だなあ。この男はまだいるか」と尋ねると、（供人が）「あそこにまだおります」と言うので、（女房は）「その男にしばらくいるようにと言え。すばらしいことがあつても、死んでしまったならば、（長谷参りの）甲斐もなく終わってしまうだろう。この男が嬉しいと思うほどのこと（十分なお礼）は、このような旅ではどうしようか、どうしようもない」と言つて、「食べ物などは持っているか。何か食わせてやれ」と言つたので、（供人が）「その男、しばらく（ここに）いなさい。御旅籠馬などが参つた時に、食べ物などいだけいておいとまじなさい」と言うと、（青侍は）「承知いたしました」と言つて（そこに）いた間に、旅籠馬や皮籠馬などが到着した。「どうして、このようにずつと遠くに後れて、遅く参るのか。御旅籠馬などはいつとも先頭に立つて、控えていることこそよいのだ。急なことなどもあるのに、このように後れるのはよいことか」など言つて、そのままそこに幔幕を引き、薄縁などを敷いて、（供人は）「水（のある所）は遠いそうだが、（ご主人様は）すっかりお疲れなさっているのので、ご主人様のお食事はここでおとりになるのがよいのだ」と言つて（その場に）とどまった。人夫たちをやるなどして、水を汲ませ食べ物を用意したので、その男にたいそうきちんと整えて食べさせた。（男は）物を食べ食べ、先ほどの柑子（のこと）を「何になるだろうか。観音がお導きなさることなので、まさか無駄には終わるまい」と思っているうちに、（女房が）白く上等な布を三匹取り出して、「これを、あの男に与えよ。この柑子のお礼は言い尽くすこともできないが、このような旅先では、（男が）嬉しいと思うほど（のお礼をする）ことは、どうしようか、どうしようもない。これはただお礼の気持ちの初めを見せるのだ」（供人は）「（ご主人様の）京でのお住まいは、どこそこでいらっしやる。必ず（訪ねて）参れ。この柑子の代わりのものは、きつと下さるだろうよ」と言つて、布三匹を与えたので、（男は）喜んで布を受け取つて、「藁筋一本が布三匹になったことよ」と思つて、（もらった布を）脇に

34ウ10・44オ2・44オ3・102ウ10・105オ9・108オ1・117オ4）は、人や物が外から内へ、または特定の範囲に入る様子を表している。本例の場合「御旅籠馬」を主語にすることも可能である。例えば旅籠馬が京に入る際は「入る」と言えるが、本例の場合、女房のいる辺りを特定の範囲とはみなしにくい。よって、「総索引」の「行移りによる『に』脱か」に従い、「御旅籠馬（の荷に水が入っているか）」と解釈する。

●9 ほとくしきやうに 『宇治』「ほとくしきさまに」「今昔」該当箇所なし。「ほとくし」は、事が迫って危うい様である。ここでは命が危ない状態。「名義抄」には「ホトくし」「字類抄」には「ホトラト」とある。「総索引」のみ「ほとほどし」と訓むが、「名義抄」の記載に基づくものと思われる。本集には本例のみ。

『類聚名義抄 観智院本』



『芭葉字類抄 前田本三卷本』（尊経閣善本影印集成18・八木書店・一九九九年）



●10 騒ぎ惑ひて、為扱う 『宇治』同文、「今昔」該当箇所なし。「騒ぎ惑ふ」は、やかましい声をたて慌てふためくこと。本集には本例のみ。「為扱ふ」は、「処置に困る・もてあます」の意。本集には本例のみ。九二丁ウ6

「走り騒ぎ」と類似の表現を繰り返すことで、供の人々の困惑の度合いをより一層強調している。

【九三丁オ】

●1 やをら歩み寄りたるに、 『宇治』「やはら歩み寄りたるに」、『今昔』「和

ヲ歩ビ寄タルニ。「やをら」は「静かにゆつくりと動く」意。そつと。「やをら」「やはら」はほぼ同義であるが、その相互関係は明確でない。歴史的仮名遣いについて研究した『疑問仮名遣』（本居清造編・勉誠社・一九二二年）の「やおら（徐々）」の項目には、「やをら」を正用とし、「やはら」の可能性もあるが、「やはら」の確例はないとする。本集には、「やをら」11例。「やはら」1例、いずれも仮名書きである。『宇治』には、「やをら」4例。「やはら」11例・「やわら」1例、いずれも仮名書きである。『今昔』には、「和」58例・「栗」2例・「軟」1例・「爛」1例・「弱」1例と、五種類の漢字が用いられている。『源氏（新大系）』には、「やをら」50例・「やおら」3例、いずれも仮名書きである。なお、「やを（お）ら」の初出は『宇津保』、「やは（わ）ら」の初出は『源氏』青表紙本の一本である。『日国』「やわら」の【語誌】には、「やを（お）ら」と「やは（わ）ら」は併用されるが、一七八世紀頃から「やは（わ）ら」は衰退し、「やを（お）ら」が勢力を得て現代に至るとする。

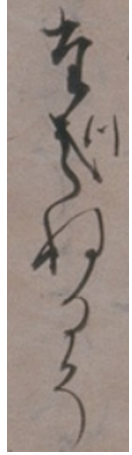
●2 「こなる男こそ、水のあり所は知りたるらめ」 『宇治』同文、「今昔」此ノ辺近ク浄キ水有ル所知タリヤ。「あり所」は、ありか。本例の他の「有とこころ」2例（55ウ4・121ウ6）は、いずれも「人の居る場所」の意。

●4 この四、五町がうちには 『宇治』同文、「今昔」此ノ辺近ク。「町」は距離の単位。一町は60間、すなわち360尺、約109メートルにあたる。「四、五町」は500メートル前後である。本集の「ちやう」は、距離3例（63オ3・93オ4・105ウ9）・面積2例（98ウ8・109オ5）。

●8 水のなきが大事なればたえぬるぞ 原本「たえぬるぞ」とあり、「え」に斜線を引いて見せ消しとし、右横に「つ」と記す。『宇治』同文、「今昔」

「水ヲ求ル也」。「大事」は、既出（前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・P12参照。「たづぬ」は探し求める意。

《九三丁オ8》

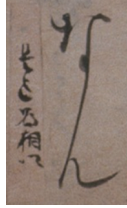


●9 「不便ふびんに候まをさことかな。」

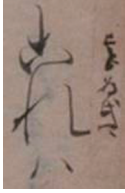
『宇治』「不便に候御事かな」、「今昔」該当箇所なし。「ふびむ（不便）」は、既出（前出『古本説話集全注釈』（第二）其の一・P 18、前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・P 13 参照）。ここでは「気の毒なこと」の意。『古典基礎語辞典』（大野晋編・角川学芸出版・二〇一二年）、『角川古語大辞典』には、平安仮名文では主として男性の会話文に用いられるとある。本集では本例を含めて2例、両例とも男性の会話文である。他作品の用例を確認する。『源氏』は9例、いずれも男性の会話文である。『今昔』は15例、会話文は11例（男性9・女性1・猿1）となっている。『宇治』は10例用いられており会話文は6例、いずれも男性の会話文である。

●10 程経ほどなる候まをさなん。これはいかゞが。」

『宇治』同文、『今昔』該当箇所なし。「程経（ほどなる）」は、「時間がかかる」意。九三丁オ左下隅に「是迄為相卿」、九三丁ウ右上隅に「是ち為氏卿」の付箋がある。本集には五枚の付箋があり、これは四・五枚目で、これより前には「是迄為氏卿（33オ）」「是まで為氏とあれども阿仏尼ならん（33オ）」「是分為相卿（33ウ）」の三枚がある。付箋について言及している諸氏（田山方南・川口久雄の解説・山内洋一郎の論文など）は、付箋の信頼性は確かめがたいが、本集が複数の手によるもので同時期の書写と考えられるとする。本稿においては、山内洋一郎氏の提示する本文四筆説に従って、九三丁オの末尾「候なん」で第三筆が終了し、九三丁ウ一行「これは」から第四筆（別筆）が始まるとみる。なお、四

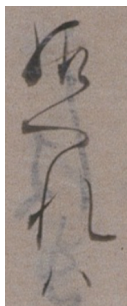


《九三丁ウ右上隅》



●8 その心を得て候まをさけるにや、

『宇治』「その心を得て」、「今昔」該当箇所なし。「その」は前の文脈を指す指示詞。「心を得」は「意味を理解する・事



《八三丁ウ6》

枚目の付箋に記された「為相」（1263～1328）は父藤原為家、母阿仏尼。冷泉家の祖で鎌倉期の歌人である。五枚目の付箋に記された「為氏」（1222～1286）は父藤原為家、母宇都宮頼綱の娘。二条家の祖で鎌倉期の歌人である。

●1三つながら取とらせたれば、

『宇治』「三ながらとらせたりければ」、「今昔」該当箇所なし。「ながら」は副助詞で既出（前出『古本説話集全注釈』（第一）其の一・P 5 参照）。数詞「み（三）つ」を受けて、「すべて、…とも」の意。「とらす」は「与える」の意で既出（92オ2）。

●5 御とのごもり入いらせ給たまつれば、

『宇治』「御殿籠り入らせ給つれば」、「今昔」該当箇所なし。「御とのごもる」の用例は他に2例（10オ5・73オ4）で、本例のみ「すっかりそうなる」を意味する補助動詞「入る」を伴う。「御とのごもる」は「大殿籠（おとのごもる）」と同義で「寝る、眠る」の尊敬語である（『古本説話集全注釈』（第二）其の三・長崎純心大学編『純心人文研究』第25号・二〇一九年二月・P 9、椎葉富美・川浪玲子「上代における『御』字の使用状況について」、長崎純心大学大学院編『人間文化研究』第17号・二〇一九年二月 参照）。ここでは気絶したことを婉曲に示している。「給つれば」について、『総索引』は「給へれば」と訓んでおり、『給へれ』の字体は「つ」よりは「へ」であるが、『給つれば』とあるべきであろう」としている。「つ」と「へ」の字体の見分けは困難であり、また、この前後に完了の助動詞「つ」を多用していること（93ウ4・5・6・7・9）から、本稿では「給つれば」と訓む。

情をさとの」の意で本集用例は本例のみ。本集では打消を伴った用例として「こ、ろもえねども（72ウ10）」、「こ、ろもえざりければ（131ウ7）」があり、どちらも「わけがわからない・事情がわからない」の意で用いられている。同義「心得（こころご）」の用例は本集に3例（127ウ7・10・133オ10）あり、こちらもすべて打消の助動詞「ず」を伴って、「わけがわからない・不思議だ」の意で用いられている。この場面では、打消の助動詞を伴わず、水がなく困り果てている女房などの様子を青侍が悟ったことを表している。「にや」は断定の助動詞「なり」の連用形「に」に、疑問の係助詞「や」がついた形で、結びの「あらむ」が省略されているものとみる。

●10 絶え入りたりけるにこそ有けれ。 『宇治』 同文、『今昔』「既ニ絶入シタリケルニコソ有ケレ」。「絶え入る」は、生気を失って気絶する、ひどく困惑したり茫然としたりする状態を表す。本集には本例を含めて3例ある。「思をういにし人なりけり」と思ふに、えやたえざりけむ、やがてたえいりて、ひえすくみにけり（48オ6）「いみじからんことありとも、たえいりはてなましかば（94オ7）」で、いずれも同じ意味で用いられている。

【九四丁オ】

●4 消え入りなまし。 『宇治』 同文、『今昔』「絶入り畢マシ」。「消え入る」は、「息が絶えてしまう・気絶する・仮死状態になる」ことを意味する。ここでは、「死ぬ」の意で用いられている。本集には本例のみである。

●4 嬉しかりける男かな。 『宇治』 同文、『今昔』「極テ喜シキ事也」。「嬉し」は、本集には、本例も含めて14例ある。ここでは、「ありがたい・かたじけない」の意で、大柑子をもらった女房の青侍に対する感謝の気持ちを表す。

●5 「かしこにまだ候」。 『宇治』「かしこに候」、『今昔』「此二候」。「かしこ」は話し手と相手との双方から離れた場所を指し示す意（あそこ）と、話の中で語られた場所を指し示す意（そこ）がある。ここでは「あそこ」と訳す。本集には、本例の他に「まづかしこにきを、きて（107ウ6）」がある。

●7 絶え入り果てなましかば、 『宇治』「絶え入はてなば」、『今昔』該当箇所なし。ただし、『今昔』には「消え入りなまし（94オ4）」に相当する箇所、「絶え入り畢マシ」とある。「絶え入り果つ」は、「絶え入る」に補助動詞「果つ」が付けれ「すっかり絶え入ってしまう」、すなわち「死に果てる」という意である。「日国」「は（果）てる」の【語誌】によると、「はてる」は限定された物・期間などが、その終局に到達することを原義とする。「はつ（果）」は、本集には本例の他に5例（32オ2・43オ4・43ウ8・90オ9・110オ1）あるが、すべて原義で用いられている。

【九四丁ウ】

●1 物など食はせてやれ。 『宇治』「食はせてやれ」、『今昔』「食ハセテ遣ハセ」とあり、ともに「物など」がない。「物など」は、「何か食べ物」の意。「食ふ」は既出（前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・補説3・P24参照）。

●1 かの男、しばし候へ。 『宇治』「あの男、しばし候へ」、『今昔』該当箇所なし。「か」は遠称を示す。女房の指示を受けた供人の言葉である。「さぶらふ」は謙譲語。女房に対する敬意を表す。

●2 物など食べて罷れ。 『宇治』 同文、『今昔』該当箇所なし。「食ぶ」は既出（前出『古本説話集全注釈』（第五八）其の一・補説3・P24参照）。「罷る」は、貴人のそばから退出すること。本集には、他に4例（46オ10・46ウ1・95ウ5・105ウ8）用いられている。ここでは、供人が女房の言葉を青侍にそのまま伝えず、女房への敬意を込めて言いかえている。

●4 皮籠馬。 「皮籠」は竹などで編んだ上に皮を張った、蓋つきの籠のこと。小泉和子氏は、「道具が語る生活史 93」（『週刊朝日百科 日本の歴史 123号』「行李・朝日新聞社・一九八八年参照）で、「皮籠」は平安時代は皮を張った箱であったが、室町時代頃になると皮製の物はほ



皮籠つくり
「七十一番職人歌合」
東京国立博物館蔵
(e 国寶より)

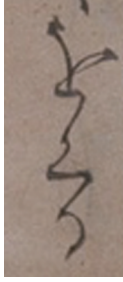
とんどなくなり、『七十一番職人歌合』(150年頃の成立か)の「皮籠」も、竹か楊(やなぎ)を網代編みにしたものであると述べる。「皮籠馬」は、それを負って運ぶ馬。『新大系』は、「参詣に際しての供物・施物始め所用に宛てるための品物を運ぶ馬。布施に絹・布・紙などが多く用いられた」と注する。

●5 御旅籠馬などは常に先に立ち、候ふこそよけれ。 『宇治』「御旅籠馬などは、つねにさきだつこそよけれ」、『今昔』該当箇所なし。諸注釈は「候」を補助動詞とするが、ここでは、貴人の側に控える意の動詞で、供人の女房に対する敬意を表すととる。

●7 頓のことなどもあるに、 『宇治』同文、『今昔』該当箇所なし。「頓」は間をおかない様で、「急・にわか」の意。『土佐日記』承平五年一月二六日条に「かぜなみ、とにやむべくもあらず(『新大系』P14)の例から、「頓」の字音(ㄱ)に母音(ㄷ)を加えて開音節化した「トニ」が「トミ」に転じたものと言われる。「に」は逆接の接続助詞。

●7 かく後る、はよきことか 『宇治』「かくをくる、はよき事か」、『今昔』該当箇所なし。「、」は改行による衍字と見る。「よきことか」は反語。

《九四ウ7》行末「をくる」



●8 やがてそこに屏幔引き、 『宇治』

「やがて幔引き」、「今昔」「即ち屏幔引」。

「やがて」は、既出(前出)『古本説話集全注釈』(第五八)其の一・P10参照。前の事態に引き続いて次の事態の起(こ)るさまを表す語、そのさまの意。「屏幔」は、貴人が屋外で人の視線を遮るため



『年中行事絵巻』巻7「屏幔」(日本絵巻大成8・小松茂美編・中央公論社・1977年)

に、周囲に張り巡らす幕。幔幕、幔とも。

●9 畳なども敷きて、 『宇治』「畳など敷きて」、『今昔』「畳敷ナドシテ」。畳はむしろ、ござ、こも、などの敷物の総称。薄縁の類。

●9 「水ぞ遠かなれど、困せさせ給にたれば、 『宇治』「水遠かなれど、困せさせ給たれば」、『今昔』該当箇所なし。「とほ(遠)かなり」は、撥音便の無表記に推定の助動詞「なり」がついたもの。「速いそうだが」の意。「こ(困)ず」は既出(92ウ3・93オ6)。

●10 人の召物はこ、にて召すべきなり」とてとまりぬ。 『宇治』「召し物はこ、にて参らすべき也」、『今昔』「昼ノ食物此ニテ奉ラムズ」。「人の召物」

は、『全書』では「人の」は軽い意味でめしものに接する修飾語。必ずしも女房の食物と限定されない」と注するが、『新聞論文』では「ご主人様のお食事」、「新大系」では「人の」は物語などの表現では、具体的に誰と指摘できる人物を意味することが多い。こども「徒歩より参る女房」即ち女主人を意識している語と見る」と注する。こは供人の言葉だが、女主人を「人」と呼び、その動作を「召すべきなり」とするのはやや違和感がある。『宇治』「今昔」ともに「人の」がないこと、『宇治』「参らすべき也」、『今昔』「奉ラムズ」と謙讓表現であることから、本集の文脈にやや乱れがあると思われる。「召す」は既出(91ウ10)。「とまる」は「その場にとどまる」の意。

【九五丁オ】

●1 夫どもやりなどして、水汲ませ食ひ物しだしたれば、 『宇治』同文、

「今昔」該当箇所なし。「夫」は夫役の人夫。「しいだす」は、「食べ物などを調える」の意。

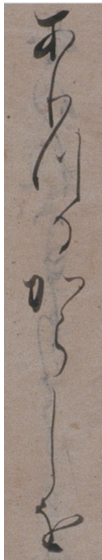
●2 その男にいと清げに物して食はせたり。 『宇治』「此男に清げにして食はせたり」、『今昔』該当箇所なし。「清げなり」は、整ってきれいなさま。

「物す」は、ここでは「食事を用意する」の意。

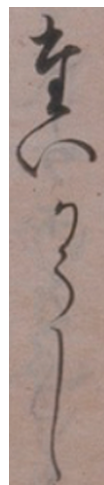
●3 物を食ふ、 『宇治』同文、『今昔』該当箇所なし。「食ふ」は動作の反復を示す。本集における動詞終止形の繰返しは、他に「ゆがむ」

1例（44オ9）、「泣く泣く」8例（43オ1・55ウ1・77ウ2・78ウ4・79ウ2・100オ6・101オ7・115ウ5）、計9例ある。動詞終止形の重複は動作の反復・継続を表していたが、次第に動詞性を失い副詞化していく。（蜂谷真郷『国語重複語の語構成論的研究』第三章 動詞の重複（二）「塙書房・一九九八年参照」。

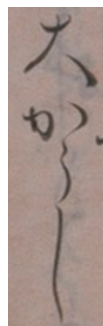
●4ありつるからしを「何、ならんずらむ。観音導かせ給ことなれば、」
 「宇治」ありつる柑子、なににかならんずらん。観音はからせ給事なれば、よもむなしくはやまじと思ひたる程に、「今昔」該当箇所なし。「ありつる」はさきほどの意。「からし」は、『岩波文』『全書』では「かうじ」と訓み、『総索引』『全註解』『全訳注』『新大系』『新聞論文』では「からし」と訓む。「かうじ」と訓める字体もある（92オ4・92オ8）が、本稿では『総索引』他の注釈書に従う。なお、本集は、「ありつる柑子を」と「を」があるので、『宇治』のように心内文に入れることはできない。さらに、『宇治』は観音のお告げのことば「いさ、かなることはからひ給をはりぬ（90ウ5）」を受けて「観音はからせ給事」とするが、本集は「観音導かせ給こと」とよりよい道を教へ示す「導く」を用いる。「導く」は本例の他に3例（87オ5・104ウ5・8）用いられ、帝釈天・行基菩薩・仏などが導くとする。「むず」は既出（92ウ4）。「むずらん」は、『日国』の【語誌】には、「中古から『むず』の單純終止は少なく、終止形の大半が『らむ』を下接するもので、中世に至って急激に増大する。本来は『らむ』が現在推量などの意味機能を担っていたと思われれるが、時代が下るとともに『むず』との弁別は難しくなる」とある。こも単なる推量である。なお、本集には「むずらむ」が他に4例（101ウ2・125ウ6・7・126オ10）あるが、いずれも心内文で用いられている。↓
補説3
 『九五丁オ4』



『九二丁オ4』



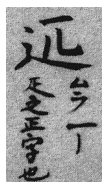
『九二丁オ8』



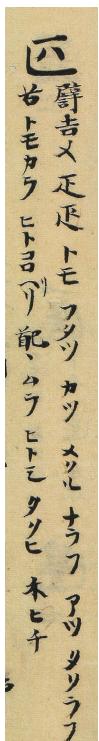
●5よもむなしくは止まじ
 「宇治」同文、『今昔』該当箇所なし。「よも」は打消推量の助動詞「じ」を伴って、「まさか……ないだろう」の意。本集には、他に本話に1例（99オ3）ある。「むなし」は「無駄である」の意で、本集には本例のみである。

●6白くよき布を三匹
 『宇治』「白くよき布を三匹」、『今昔』「清キ布ヲ三段」。「布」は、麻・苧麻・葛などの植物繊維で織った織物。「匹」は、巻いた布を数える助数詞である。他に「反・段・端・疋」などがある（『日本大百科全書』「反物」小学館・一九八四年参照）が、「むら」と訓むときには、「匹・疋・段」などの字をあてて。本稿では、古辞書の記述に基づいて「匹」の字を用いた。

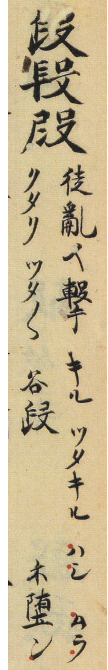
『色葉字類抄 黒川本』（風間書房・一九六四年）



『類聚名義抄 観智院本』



『類聚名義抄 観智院本』



●8喜よび 「宇治」同文、『今昔』「喜シサ」。本集での名詞「喜よび」は他に2例（66オ2・74オ6）で、いずれも「お礼」という意味で用いられている。

『今昔』は「喜うれ」シサ」なので、柑子をもらった主人の嬉しさとなる。

●9かか、る旅たびにては、嬉うれしと思ふばかりの事は、いかかはせむずる。 『宇治』「か、る旅の道にては、うれしとおもふ斗の事はいかかせん」、「今昔」

「此ル旅ニテハ何ニカハセムト為ル」。九四丁オ9〜10行目の「この男の嬉しと思ふばかりの事は、か、る旅にてはいかかせん」とほぼ同じ表現が繰り返されている。したがってここでも「嬉うれしと思ふ」の主語は「この男」とした。この柑子に関する話は『今昔』よりも長くなっており、『今昔』にはない繰り返しが生じている。「いかかはせむずる」は、諸注釈同様反語ととる。 ↓ 補説1・3

●10これはたた心こころざしの初はじめを見みする也 『宇治』同文、『今昔』「只此ハ志ノ初メ許ヲ見スル也」。「心こころざし」は、この後で布三匹を与える展開を考えれば、「お礼の気持」という意味にとるのが妥当と思われる。女房の青侍に対する感謝が並々でないのは、前項に指摘した繰り返しからも分かるので、その手始めとして布三匹を渡すということだろう。

【九五丁ウ】

●1「京のおはましい所ところは、そこそこにななををははしします。 『宇治』「京のおはしまし所は、そこそこにななををははしします。 『今昔』

は主人の言葉として自然な表現だが、本集・『宇治』の「おはしまし所」、本集の「をはします」は話し手の自尊敬語ととられる表現である。しかし、この女房の身分がそれほど高貴なのかと考えると不自然な印象を受ける。女房が青侍に直接言葉をかけたのでなく、供人が取り次いだのであり、供人の敬

意を反映していると考えられないが、それでも一続きの会話としては無理のある表現となっている。よって、前半を女房の言葉、後半を供人の言葉とした。『新聞論文』でも同様に解釈している。

●2この柑子たちのい物ものは、賜たまはんずるぞ 『宇治』「此柑子の喜をばせんずるぞ」、『今昔』該当箇所なし。「賜たまふ」は既出（前出『古本説話集 全注釈』（第五

八）其の一・P20参照）。四段動詞「賜たまふ」の本集での用例は11例、未然形での用例はこの箇所のみ。話し手の供人が主の女房への高い敬意を示す表現となっている。 ↓ 補説1・3

●3布三匹ぬのを取とらせたれば、 『宇治』「布三匹取らせたれば」で、ほぼ同文。『今昔』には該当本文はないが、先に「主人此ノ男ニ云ク、清キ布ヲ三段取

出シテ給テ云ク」とある。「取とらず」は既出（92オ2）。

●4「藁筋わらぢ一つが布三匹ぬのになりぬること」 『宇治』「藁筋一筋が、布三匹になりぬる事」、『今昔』「藁筋一ツガ布三段ニ成ヌル事、此レ観音ノ御助也ケリ」。文末の「こと」については既出（92オ4）。『今昔』には「此レ観音ノ御助也ケリ」という言葉があるが、本集や『宇治』にはない。ただ本集や『宇治』では先に観音のお恵みを期待するという『今昔』にはない青侍の心内文（95オ4〜6）があり、観音の助けであることを間接的に表している。

●5脇わきに挟はさみて罷まかるほどに、 『宇治』同文、『今昔』は青侍の心内文の前に「男布三段ヲ取テ脇ニ挟ムデ」とあり、その後で「心ノ内ニ喜テ行ク程ニ」となっている。「脇わきに挟はさむ」は、本集では他に第四〇話に「かみ、いみじくほめて、きたりけるきぬをぬぎて、とらす。北方もあはれがりて、うすいろのきぬの、いみじうかうばしきを、とらせたりければ、二ながらとりて、かわくみて、わきにはさみて、たちさりぬ（54ウ5）」という例がある。貧しい侍が詠んだ和歌を越前守と北の方が褒めて衣を与えた場面である。両例とも、身分の高い人から褒美の品をいただいた人（青侍・貧しい侍）は、その布帛を脇わきに挟はさむ。『新大系』の注では「巻いた布帛などの被け物を受取った場合のあつかい方。当時の風習、作法。脇差、腰挿などとも呼ばれる」とする。

●5その日は暮れにけり。

『宇治』同文、『今昔』「其ノ日暮ヌレバ」。夢で観音の使者のお告げを受けた青侍は、朝方、長谷寺を出るときに拾った藁筋一本に蛇をくくりつけ、それを若君に渡して大柑子三個を手に入れ、大柑子を喉の渴きに苦しむ女房に渡したことで布三匹を受け取り、その長い一日が終わった。

補説1 「大柑子」と水について

大柑子は、『日国』には「大きい柑子。現在の夏みかん」とあるが、実際にはどのようなものであったかはよくわからない。日本の柑橘類の最古の記述としては、『古事記』『日本書紀』に田道間守が垂仁天皇の命で常世国から非時香菓を持ち帰ったとあり、記紀はそれを「橘」としている。しかし、『カンキツ総論』（第一章 カンキツの歴史・P15～20・岩堀修一他編・養賢堂・一九九九年）によれば、「橘」は日本在来の野生種であるから、遠い常世国から取り寄せるはずはなく、日本に古い時代に導入されたコミカン（紀州コミカン）とする説とダイダイとする説とがある。『続日本紀』の聖武天皇・神亀二年十一月十日の条には次の記述がある。

中務少丞従六位上佐味朝臣虫麻呂、典鑄正六位上播磨直弟兄並授従五位下。弟兄、初齋甘子、従唐国来。虫麻呂先殖其種結子。故有此授焉。

（『新大系二』P162）

ここでの「甘子」は「柑子」のことである。遣唐使播磨直弟兄が唐から種を持ち帰り、それを佐味朝臣虫麻呂が長年栽培して実を得たことで、二人とも位を授けられた。いかに「甘子」が当時貴重だったかがわかる。「柑子」について、前掲『カンキツ総論』は「柑子（コウジ）は在来のタバナと渡来したミカン類との雑種とみなされ、8～9世紀にはすでに発生し地域的に広がっていた（P17）」と述べている。

平安時代になると、『大鏡』『太政大臣伊尹』に齋院の行列見物に出た花山院の逸話がある。

ちみさき甘子をおほかたの玉にはつらぬかせ給て、だつまには大甘子をしたる御ずゞ、いとながく御さしぬきにぐしていださせたまへりしは、さるみものやはさぶらひしな。

（『大系』P250）

賀茂祭の翌日、花山院は「ちみさき甘子」を普通の玉として紐に通し、「大甘子」を達摩（だま）とめにする大玉にした数珠を、たいそう長く指貫とともに車の御簾の外に出した。「さるみものやはさぶらひしな」と語り手が言うほど人々の目を引いたらしい。ここでの「大甘子」は現在の夏ミカンにあたるものだろう。ただし、現在の夏ミカンが普及したのは明治以後であるから、実の熟す時期は同じだろうが、「大甘子」は夏ミカンとは別のものである。

また『今鏡』『藤波の上』には小野の里に籠もっていた皇太后宮（歿子）が雪見の御幸の折、白河院をもてなした話がある。

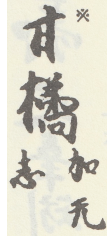
汗衫著たるわらは二人、一人は白銀の銚子に、御酒入れてもて参り、いま一人は白銀の折敷に、黄金の御坏据えて大柑子御さかなにて、出だし給へりければ、御どもの殿上人とりて参りて、いとめづらしき御用意に侍りけり。

（『日本古典全書』P178）

白銀の折敷に黄金の坏とともに大柑子を添えたのだとすると、大きさは今の夏ミカンぐらいかと思われる。ただし、ここでは季節が冬なので、大柑子は柑子（今のコウジミカンかコミカンにあたるものか）の大きなものだろう。

同じ大柑子でも『大鏡』と『今鏡』とでは別の物のようだが、いずれにせよ花山院が数珠代わりに使い、皇太后宮が白河院のもてなしに使うのだから、古代の貴族社会では大柑子は身近にあつて、それなりに価値のあるものだったと思われる。本話の場合、蛇が飛びまわる季節なので、青侍がもらった大柑子は花山院が使ったものに近く、藁に結んだ蛇のお札に大柑子三つを香をたきしめた陸奥国紙に包んで与えたことからすると、女車の主は相応の身分と財のある人だと思われる。

『天治本 新撰字鏡(増訂版)』 『類聚名義抄 観智院本』



ところで、青侍がこの大柑子を得てから布三匹を得るまでの記述が、本集と『宇治』では『今昔』に比べて長い。その差を本集と『今昔』との文字数の差で示したのが、『資料1』である。話の展開ごとの文字数の比率を見ると、青侍が〈大柑子を布に替える〉部分で、本集が30.9%であるのに対して『今昔』が23.8%と違いが目立つ。具体的には、『資料2』にあるように、旅籠馬、皮籠馬についての記述、青侍の会話文・心内文、供人の会話文、女房の会話文などで、本集の記述量が増えている。そのため供人の言葉と女房の言葉とで同じことを繰り返したり、女房自身が同じことを繰り返したりしている。また、本集では青侍に食事を与えたり布三匹を与えたりする際に、供人が介入することが『今昔』より多く、女房が高貴な身分であるような印象を与えている。さらに本集では、〈大柑子を布に替える〉部分で「水」が15回繰り返し返されており、『今昔』6回の倍以上となっている。このような『今昔』本文との違いには何か意味があるのではないだろうか。

長谷観音は今も左手に水瓶を持っておられる。長谷寺の観音について梅原猛は「十一面観音信仰は特に日本で盛んになったが、それはやはり十一面観音が稲作農業に必要欠くべからざる水の仏であったからであると思う。水の仏の信仰は、泰澄の白山信仰において明らかであるが、長谷寺は飛鳥川などの水源の地であり、長谷の十一面観音も水の仏という性格を備えている」(『新版 古寺巡礼 奈良2 長谷寺』「聖なるもの俗なるもの」P13・淡交社・二〇一〇年)と述べている。また、長谷寺のある初瀬の地について、達日出典は『長谷寺史の研究』(第二章「泊瀬の上の山寺」考・巖南堂書店・一九七九年)で、三方を山で囲まれた初瀬川

〔邦訳 日葡辞書〕

†Canji. カンジ(柑子) 蜜柑.

Cōji. カッジ(柑子・橙) 甘い蜜柑の一種。【Cōjifu-subc.(柑子燻) この蜜柑の色のよういぶした革などの色.

沿いの山峡の地であり、初瀬川上流に滝蔵神、初瀬の東口に山口神が鎮座しており、これらの神は水神信仰・竜神信仰・雷神信仰などの主として地域の人々の厚い信仰を得ていたと述べている。さらに『長谷寺験記』上巻第三話には、蓮華大会の始まりに関して、開山徳道上人の次のような逸話がある。

往古ヨリ瑞池ノ上ハ谷ニ満テ又紫雲有リ徳道上人恠テヨク／＼見レハ二天各天花ヲ以テ件ノ池ニ洗テ金瓶ニ池水ヲ結ヒ蓮花峯ノ紫雲ニ返リ入テ諸人ト共ニ観音堂ノ前ニ行テ音楽ヲ奏シ蓮花ヲ散シ水灑テ大聖ヲ供養スル事良久如此スル事毎年六月十八日也

(『長谷寺験記』P23・新典社善本叢書2・新典社・一九七八年) このように水と縁の深い長谷寺に関わる本話で、「水」が何度も繰り返されるのは無意味なことではないと思われる。青侍は水に代わる大柑子三つを差し出すことで、布三匹というよい報いを受けたのである。

「致富譚」の類型としての物々交換説話はアジア、ヨーロッパにも類話が見られ、韓国にも同種の民話がある(『金成根「物々交換説話」管見——『粟一粒』・『粟しべ長者』に関する覚え書き——』長崎純心大学大学院編「人間文化研究」第19号・二〇二二年二月参照)。本話はいわゆる「粟しべ長者」の話であり、粟を果物、布、馬、田畑と替える「観音祈願型」と言われる類型に属する(前出『古本説話集』研究上の諸問題(二)P82〜84参照)。その点で本話と『今昔』との間に構造の違いはない。しかし本話では、女房の喉の渴きや水の大事さが、表現の繰り返しによって『今昔』よりも強調されており、大柑子三つを差し出した青侍に女房が並々ならぬ感謝を示したことも納得しやすくなっている。さらに、青侍が大柑子三つを差し出したのは、対価を想定した物々交換ではない。喉の渴きに苦しむ女房に同情したからである。しかもその大柑子は、「佛の賜びたる物」である粟に結んだ蛇をちこの求めに応じて差し出したことで得たものである。

水に縁の深い長谷寺に参詣しようとする女房が、喉の渴きに苦しんで水を欲しがり、青侍が自分の財のすべてである大柑子三つを水の代わりに差し出すと

いう布施のごとき行いをし、その報いとして布三匹というさらに価値ある物を与えられたのである。類型的な致富譚を長谷観音の靈験譚として印象づけようとして、本話においては青侍が（大柑子を布に替える）部分を詳しくしたのではないだろうか。

また、青侍がちごに所望されて藁でくくった蛇を差し出して女車の主（女性）から大柑子三つを与えられ、女房にその大柑子を差し出して布三匹を与えられるという展開にも意味があるように思われる。

観音が女の身となって靈験を現すのは、本集の第四八話、五四話の観音靈験譚に見られ、観音が童子の姿でお告げをしたり靈験を現したりする話は、管見によれば『長谷寺験記』全52話中14話ある。本話は観音の化身が出現しない類型の話であり、すでに『今昔』（新大系三）巻十六の解説（P466）に指摘がある。しかし、青侍が長谷寺を出て藁を捨てて蛇を結び、女車に乗ったちごに出会って蛇を大柑子三つに替え、さらに水を欲しがる女房に出会って大柑子三つを布三匹に替えるというきわめて都合のいい展開が、そのまま受け入れられ、長谷観音の靈験譚として伝えられてきた。それは、話の語り手や書き手が背景としていた「長谷観音的世界」ともいえる認識が、聞き手や読み手にもあらかじめ共有されていたからではないだろうか。

長谷寺は古くから多くの貴賤の人々の信仰を集めていたとはいえ、都周辺の清水寺や石山寺に比べるとはるかに遠く、容易なことでは赴けない。本話には、靈験あらたかな十一面観音のおわします長谷寺に人々の関心を向け、そこに行こうという気にさせる要素が備わっている。長谷観音の靈験を語る聖たちがそのような話を膨らませやすかったと考えてみるのは興味深いことである。

【資料1】『古本説話集』と『今昔物語集』の文字数比較

『古本説話集』第58話				『今昔物語集』巻第16第18話		
展開	範囲	字数	比率	範囲	字数	比率
発端	89才6～90才9	435	9.9%	P542L8～P543L2	319	12.8%
夢告	90才9～90才9	188	4.3%	P543L3～P543L6	120	4.8%
藁を得る	90才9～91才7	148	3.4%	P543L7～P543L9	91	3.6%
蛇を捕らえる	91才7～91才4	131	3.0%	P543L10～P543L12	70	2.8%
蛇を大柑子に替える	91才4～92才10	327	7.4%	P543L13～P544L3	204	8.2%
大柑子を布に替える	92才10～95才6	1363	30.9%	P544L3～P545L7	593	23.8%
布を馬に替える	95才6～98才3	1047	23.7%	P545L8～P546L15	726	29.1%
馬を家と田に替える	98才3～99才5	517	11.7%	P546L15～P547L7	228	9.1%
結末	99才5～99才6	253	5.7%	P547L8～P547L12	145	5.8%
計		4409	100%		2496	100%

（表の見方）

- ・『古本』は『総索引』本文、『今昔』は『新大系』本文の字数を数えた。
- ・句読点、「」は字数に含まない。繰り返し記号は一字で数えた。
- ・『古本』で『総索引』編者が漢字をあてている箇所は元のかなを数えた。
- ・『古本』の補入箇所は本文として数えた。
- ・『今昔』で漢字に付してある読みがなは字数に含めていない。

【資料2】『今昔』にない記述

<p>10 「ゆえある人」</p>	<p>3 それを食ひて、やう／＼目を見開けて、「こはいかなり つることぞ」と言ふ。「御喉渴かせ給ければ【本飲ま</p>	<p>7 そよけれ。頼のことなどもあるに、かく後る るゝはよきことか」など言ひて、やがてそこに屏帳</p>	
<p>【九二丁ウ】</p>	<p>4 せよ」と仰せられつるまゝに、御とのごもり入らせ 給つれば、【本求め候ひつれども、清き女</p>	<p>8 引き、畳どもなど敷きて、【本そ遠かなれ</p>	
<p>1 の忍びて参るよ」と見えて、侍などあ</p>	<p>5 也」と言ふに、この女房「我はさは喉渴きて絶え入りた</p>	<p>9 ど、困ぜさせ給にたれば、人の召物はこゝにて召</p>	
<p>2 また具して、徒歩より参る女房の、歩み</p>	<p>6 もつゆおぼえず。この柑子得させざらましかば、</p>	<p>10 【九五丁オ】（二八九頁）</p>	
<p>3 困じて、たゞ困りに困り居たるが、「喉</p>	<p>7 ける男かな。この男はまだあるか」と問へば、「か</p>	<p>1 すべきなり」ととまりぬ。夫どもやりなどして、</p>	
<p>4 の渴けば、【本飲ませよ】とゆき入りなんず</p>	<p>8 この野中にて消え入りなまし。嬉しかり</p>	<p>2 【本汲ませ食ひ物しだいしたれば、その男</p>	
<p>5 る様にすれば、供の人々、手惑ひをして、「ち</p>	<p>9 しこにまだ候」と言へば、「その男暫しあれと</p>	<p>3 にいと清げに物して食はせたり。物を食ふ／＼、</p>	
<p>6 かく【本】やある」と走り騒ぎ、求むれども、</p>	<p>10 しかば、かひなくてこそ止みなましか。このをと</p>	<p>4 ありつるからしを、「何ゝならんずらむ。観</p>	
<p>7 【本】もなし。「こはいかゞせんずる」【御旅籠馬</p>	<p>1 言へ。いみじからんことありとも、絶え入り果てなま</p>	<p>5 音導かせ給ことなれば、よもむなしくては止</p>	
<p>8 や入りにたる」と問へど、「はるかに後れたり」と</p>	<p>2 しかば、かひなくてこそ止みなましか。このをと</p>	<p>6 まじ」と思ひたるほどに、白くよき布を三匹</p>	
<p>9 て見えず。ほど／＼しきやうに見ゆれば、まことに</p>	<p>3 この野中にて消え入りなまし。嬉しかり</p>	<p>7 取り出で、これ、あの男に取らせよ。この柑</p>	
<p>10 騒ぎ感ひて、為扱うを見て、「喉渴き</p>	<p>4 ける男かな。この男はまだあるか」と問へば、「か</p>	<p>8 子の喜びは言ひ尽くすべき方もなけれども、</p>	
<p>【九三丁オ】</p>	<p>5 しこにまだ候」と言へば、「その男暫しあれと</p>	<p>9 かゝる旅にては、嬉しと思ふばかりの事は、いかゞ</p>	
<p>1 て騒ぐ人よ」と見えてければ、やをら歩み</p>	<p>6 言へ。いみじからんことありとも、絶え入り果てなま</p>	<p>10 はせむずる。これはたゞ心ざしの初めを見る也」</p>	
<p>2 寄りたるに、「こゝなる男こそ、【本のあり所</p>	<p>7 しかば、かひなくてこそ止みなましか。このをと</p>	<p>【九五丁ウ】（二九〇頁）</p>	
<p>3 は知りたるらめ「この辺近く、【本の清</p>	<p>8 しかば、かひなくてこそ止みなましか。このをと</p>	<p>1 「京のおはしまし所は、そこ／＼なんをはします。か</p>	
<p>4 き所やある」と問ひければ、「この四、五町がうち</p>	<p>9 この嬉しと思ふばかりの事は、かゝる旅にては</p>	<p>2 ならず参れ。この柑子のかはりの物は、賜ばんずるぞ」と</p>	
<p>5 には清き【本候はじ】いかなることの候にか」</p>	<p>10 いかゞせんずる」とて、「食ひ物などは持て来たるか。</p>	<p>3 言ひて、布三匹を取らせれば、喜びて布</p>	
<p>6 と問ひければ、「歩み困せさせ給て、御喉の</p>	<p>【九四丁ウ】（二八八頁）</p>	<p>4 を取りて、「薬筋一つが、布三匹になりぬる</p>	
<p>7 渴かせ給て、【本右さんと仰せらるゝに、</p>	<p>1 物など食はせてやれ」と言へば、「かの男、しば</p>	<p>5 ことゝ思ひて、脇に挟みて罷るほどに、その日は</p>	
<p>8 【本のなきが大事なればたづぬるぞ】と言ひ</p>	<p>2 候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など</p>	<p>6 暮れにけり。</p>	
<p>9 ければ、「不便に候ことかな。【本候所は</p>	<p>3 食べて罷れ」と言へば、「うけ給はりぬ」とていたる程に、</p>	<td data-bbox="267 1232 308 1742"> <p>※赤の塗りつぶしは、大柑子を布に替える」場面で、 『今昔』には、該当箇所がないことを示す。 ※「水」の用例は□で囲んだ。</p> </td>	<p>※赤の塗りつぶしは、大柑子を布に替える」場面で、 『今昔』には、該当箇所がないことを示す。 ※「水」の用例は□で囲んだ。</p>
<p>10 遠き也。汲みて帰り参らば、程経候なん。 【九三丁ウ】</p>	<p>4 旅籠馬や皮籠馬など来着きたり。「など、 かくはるかに後れて、遅くは参るぞ。御旅 籠馬などは常に先に立ち、候ふこ</p>		
<p>1 これはいかゞ」とて、包みたる柑子を三つながら取</p>	<p>5 かくはるかに後れて、遅くは参るぞ。御旅</p>		
<p>2 らせられたれば、喜び騒ぎて食はせられたれば、</p>	<p>6 籠馬などは常に先に立ち、候ふこ</p>		

補説2

「徒歩より参る女房」について

本話九二丁ウ2には、「侍などあまた具して、徒歩より参る女房」とあるが、『今昔』では「侍ナド具シテ、歩ヨリ長谷へ参ル有リ」とあり、本集には「長谷へ」という語句が記されていない。この場面は、青侍が長谷寺に三七日（二日間）参籠して夢告を得た朝、寺を出て帰る途中のできごとである。二日目の夜は、「うぢわたり（97ウ10）」で宿泊したことを考え合わせると、青侍が通ったのは平安時代から院政期にかけて盛行した「長谷詣で（長谷参り）」の京からの一般的な道筋と考えられる。したがって、この「ゆえ（糸）ある」と見える女房は京から長谷参りの道中だったと考えられ、ここでわざわざ「徒歩より」と記すのは意味があると思われる。

《京都・宇治・木津・奈良・椿市・長谷寺》



（前出『古本説話集 全注釈』（第五八）其の一・P10 参照）

本集には、「女房」17例・「女房ども」3例、計20例ある。『日国』『女房』の【補注】には、「にようぼう」から変化した語に、「にようぼ」がある。また、「なうぼう」「にうぼう（にうほう）」と表記されたものも見られ、それは一般に

は「にようぼう」と読まれたものと考えられている」とある。本集では、20例すべてが漢字表記になっている。そのうち、「宮中・院・宮・一般の貴族の家などに仕える女性」の意は11例（上巻9例・下巻2例）、本例と同じように「身分ある女性」もしくは「一般女性」の意は9例（上巻目録1例・下巻8例）である。「長谷詣で」については、『長谷寺史の研究』第五章「長谷詣で」考——その実態と変遷——に詳述されており、それによると「重要な祈願には、徒歩で行くという考え方（あるいは信仰）があり、それを実行している（P137）」と述べている。同書が挙げている裏付けの史実、小野右大臣藤原実資『小右記』の正暦元（990）年九月の記事の一部を紹介する。

六日、戊寅、寅時許歩行自望忠宅参長谷寺、於途中遇雨、

八日、庚辰、寅剋許従此寺步行参長谷寺、於途中朝食、午後至椿市、

また、『源氏物語』玉鬘巻には、母夕顔を探すために筑紫から上京した玉鬘一行が、靈験あらたかと評判の高い長谷寺を目指す場面が描かれる。

殊更にかちよりとさだめたり。ならばぬ心ちいとわびしくくるしけれど、人のいふま、にもものおほえであゆみ給。…中略…からうしてつばいちといふ所に、四日といふみのとさばかりに、いける心ちもせでいきつき給へり。〔新大系二〕P345

同じ頃、玉鬘を探す夕顔の乳母子右近一行も長谷詣でをしていた。

これもかちよりなめり。よろしき女ふたり、しも人どもぞ、おとこ女、かぞおほかむめる。…中略…とし月にそへて、はしたなきまじらひのつきなくなり行身を思ひなやみて、このみ寺になむたびくまうでける。〔新大系二〕P346

玉鬘も右近も、徒歩で長谷寺を目指す。京都から長谷寺まで約72km、宇治・木津・奈良・椿市を経由した。牛車で三日はかかる行程である。身分ある女性がわざわざ歩いて参詣するのは大変な難行であった。本話においても、供を大勢引き連れた「徒歩より参る女房」は、重要な願い事を抱えた大切な参詣の途次であり、「徒歩より」は信心の誠を示すものと考えられる。

『節用集 伊京集』（改訂新版・影印篇・勉誠出版・二〇〇九年）



『節用集 饑頭屋本』



【邦訳 日葡辞書】

Nho. ニヨ (女) Vonna.(女) 女.
Nhôbô. ニヨ ッバ ッ (女房) 同上.



『年中行事絵巻』 卷四「徒歩まいり」

補説3

「むず」ごごい

助動詞「むず」は推量の助動詞「む」に格助詞「と」、サ変動詞「す」の付いた「むとす」が変化したものとされている。『日国』「むず」の【語誌】では、中古中期では、多く会話文に用いられ、意味の上で「べし」との類似性もあるが、「むず」は私的な判断に基づく主観的で情意的な表現に用いられる点で「べし」とは異なるとする。中世になると盛んに用いられるようになったことは多くの辞書の記すとおりである。「むず」の本集での用法については「其の一」（前出『古本説話集 全注釈（第五八）其の一・P14 参照）の語釈で既に触れているが、それを詳述したのが次頁の表である。

本集での「むず」は32例あり、会話文19例・心内文9例で、ほとんどの用例は「むず」の基本的用法に即している。上巻には第六話の1例のみであるが、前半部分の『和泉式部日記』に基づく箇所ではなく、後半部分の『後拾遺和歌集』雑五の詞書に基づく歌徳説話の会話文で用いられている。『和泉式部日記』に基づいて帥宮とのやりとりを記した箇所では、『枕草子』が若者の物言いと

して非難されるべき省略形とした「むず」は使用されていない。それに対して『後拾遺和歌集』の詞書を説話にした箇所に、「むず」が和泉式部の言葉として使われているのは、本集が書かれた時代の言葉遣いを反映しているのではないだろうか。

下巻の31例中11例が本話にあり、3分の1を占めている。地の文での「むず」の使用は本集全体で4例だが、そのうち3例が本話にある。

本話と同話である『宇治』巻七ノ五で「むず」が用いられているのは、本話と共通する7例のみである。対照説話としてあげた『今昔』巻第十六ノ二十八では、「ムトス」という表現が基本で、「ムズ」は3例、①「昼ノ食物此ニテ奉ラムズ」（地の文）、②「布三段ガ此馬ニ成ムズルニヤ」（青侍の心内文）、③「物へ行ムズル様ニ出立チ騒グ」（地の文）とあるが、本集や『宇治』と重なるのは③の用例のみである。本話以外でも『宇治』と本集では「むず」の使用に重なりが見られるが、本集の用例と『今昔』が重なるのは2例（98オ4・101ウ2）のみである。

以上のことから、本集と『宇治』の本文は同系統で、『今昔』とは異なる伝わり方をしたことがわかる。さらに本話に関しては、「むず」の使用が『宇治』よりも多く、本集の中でも際立って多い。会話文に用いられた「むず」が多用され、地の文にも見られることは、本話が『宇治』と共通する本文を基にしつつも、伝播の過程に長谷観音の霊験を説く聖が存在したことを想像させる。

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
	70	69	67			64	62	61			
135ウ5	135オ6	131オ3	126オ10	126オ10	125ウ9	125ウ7	125ウ6	114ウ1	107ウ2	105ウ8	105ウ3
かくてしなでやみなんずるなめり。	あさてのゆふがたかへりなんず。	いかやうにてかおはしまさんずる。	のこりのつとめ、いかにいはむずらん。	ひとところはいなむず。	あすたうへんずる也。	ひとひにいつところよばど、いかせむずらん。	おのづからおなじひもきてよばど、いかせむずらん。	我はこのじやにくはれなむずるなめり。	そこにてぞあはむずる。	これはいづくにまかりてうけとらんずるぞ。	いかせむずる。
会	会	会	心	心	会	心	心	心	会	会	心
牛を見た人々の言葉	牛↓聖(聖の夢)	(夢告に対する問い)	女	女	田植への依頼者↓女	女	女	鷹生	吉祥天女↓法師(夢の中)	世恒↓女房	世恒
		同文						同文		同文	同文
牛不死テ止ナムズルナメリ	明後日ノ夕方婦ナムトス	何様ナル姿ニテ兼給ハムト為ルゾ						(該当箇所なし)		何コニ行テ可請キゾ	亦何ガ為ム

(二〇二二年十月六日受理)